B772は水平飛行に移った、市松模様のシャツにカーゴパンツの一平はシートベルトを緩めリラックス、隣にはパンツスーツのまりが座る。二人は二十違い今で言う歳の差婚の二人だ。CAさんは飲み物がぎゅーと載ったワゴンを押し機内サービスを始めた。

一平はコーヒーをまりは紅茶、CAさんは手慣れたもの。

「テーブルをお出し下さいミルク砂糖は如何でございますか」

等々、一平はCAさんの名札を見た松下紀子と記されているが幾分写真が違うような、そんな一平を察したかCAさんは言う。

「以前は長い髪の毛を束ねていましたが今は規定ギリギリまで解き前髪も同様に、顔の輪郭も幾分細くなりました、それで相違があるように見えるかもしれません、更新時に写真を撮り直しますそれまではこのままです」

と業務スマイル。

一平納得、まりが余計な事聞かんでもと脇腹を肘で突っついた。間もなく着陸態勢に入るのだろう飲み物容器回収が始まった、先程のCAさんが我々のブロックを回収し始めた、笑顔を絶やさず手際よく、他に気にしつつ一平に話しかけてきた。

「ご搭乗者様は刑事さんではございませんか」

一平もまりも顔を見合わせあっと小声なれど発してしまった。

「図星のようですね、お二人は特命とやらで北海道へ行かれるようですね」

CAさんの言に二人はあたふた、

「刑事であったが今は退職の身、道央に嫁いだ娘の出産に立ち会う為に行くんです」

まりは言った、CAさん一瞬たじろぐが意味深に好都合ですと言い放う。

「お願い事があります、今宵自分達クルーは千歳Sホテルが宿泊所になっています、そこの十二階がレストランになって

いて一日の労を労う場でもあります、そこに午後七時にお待ちしています奥様もご一緒に」
と言い残し次の席に行った。
「娘の出産予定は明日だ、お願い事を聞きに参りましょうよ」
まりは乗り気だ、飛行機は予定どうり新千歳空港に着陸、娘の連れ合いが迎えに来ている筈だ、スーツケースを受け取り出口方向に、両開きガラス戸が開いた、十メートル先真正面に川北誠（セイ）ちゃんは笑顔と共に右手を挙げる。
「いらっしゃい、下の駐車場に車があります、そこのエスカレーターから行きましょう、それにしてもこの大荷物、とても二泊三日とは想いません、もしかして母上ご愛用の着物が入っているのでは」
とセイちゃんは笑う。
「そうなんだよ、着て行く所なんぞあらへんでと言ったが効かんよ」
「父上も苦労なさっておりますなー」
とセイちゃんはまりの隙を見て小生に声かける。
「今晩着る機会がありますよセイちゃん」
セイちゃんはきょとん、てな事を言いつつハイブリットカーに乗り込んだ。
「滑って転んでは何とやらまずはアイゼン付きのスニーカーを探しに行きましょう」
雪が残るＲ３６に出る。
「現在は三車線なれどいずれ降雪によりセンターライン寄り一車線になります」
等々セイちゃんは言う、アドバイス宜しく程ほどのアイゼンスニーカーが手に入った。
「カードとやらは持たん主義の小生だが過日申請したんだ、カードでの支払い上手かー使えるかな」
恐る恐る店員さんに、店員さんは手慣れたもんや数秒後に有難うございました、一安心。だけんどとセイちゃんは

言い始める。
「飛行機搭乗の際アイゼンが保安検査でブザー鳴ってしまう」
と付け加えた。足元は整った、後は自己責任やとまりとハイタッチ、セイちゃんに千歳のRホテルに送ってもらい明日の時間を打ち合わせし別れる。
ロビーのカウンターでは受付嬢がいらっしゃいませと、営業言葉を掛けてきた。
「部屋は七階のご希望どうり１０４３号室をご用意させて頂きました、カギはチックアウトまで宿泊者様で管理して下さい、それでは道央の良き旅をお楽しみ下さい」
まりはカギを受け取りルンルン気分で七階に、部屋に入りやや高めな声を放った。
「ベット一つしかないよ、偶には別々に寝ようか、ツインと言っとってたが一平話が違うよ」
頭掻きながら弁解を始める。
「ＰＣと相対し数十年になる、今だキーボードさんとは雨垂れ付き合い、ツインを予約なれど何処をどー叩いたか分からんがダブルベットになってしもうた、変更法もよー分からんで今日に至った」
まりは眉毛を吊り上げた様だが何時ものまりに戻った、ＣＡさんとの時間まで間があるシャワー浴びてくる、一平はまりの視界から消える。
一平は出てくるなり下着だけ替えさっきの出で立ちに、まりのシャワーと着替えの間にテレビを見ていた、これと言ってニュースもなく見ているまんま半時、よーやくまりはテレビのある居間風な部屋に現れた。
っあ、一平は発す
「どーするんだその出で立ちは」
声を詰まらせ言う、今では珍しい黒髪を胸まで伸ばし、それを起用に巻き束ねピンでとめ九谷焼の金指を差し、小紋を着おったまりが佇んでいた。

「おーい歩って１０分とは言え、その格好でＳホテルに行くんと違うけ、アイゼン付き駒下駄でも履いて行くんかや」
「いいえ、足袋に草履でございまする」
一平ぽかーん
「一平と違ってカードは慣れております、車を頼みました支払いはそれで、もー来てる時間ですフロントに行きましょう」
まりは某店の長めのダウンジャケットを着物の上から羽織った。
Ｓホテルのフロントに寄った、受付嬢はまりの出で立ちを見、はてなと言う顔をしとる、一平は受付嬢に言った。
「東京から来た谷端です、こちらにお泊りの松下さんとラウンジでお約束しています」
怪訝そうな眼で二人を見とった受付嬢、普段の営業笑いを見せ始めた、
「あちらの観葉植物置いてあるところを右に折れ、先にエレベーターがございます、それで十二階にお進み下さい」
礼を申し、まりの背をそっと手を当てがい向かう。
ガラス造りの扉はすーっと開いた、小生にゃーよー分からんがクラシック音楽が流れいる、やや暗めなれど十間ほど離れた人は見分けは出来る、二面がガラス張りで窓からは明るさ残る千歳市が、帳を告げが如く灯が点在し始める。対角の隅に扇形カウンターがあり棚には見慣れたラベルが眼についた、ソファーは無いがテーブル席が２０程度、席は七分程埋まっている。
小さいのか肉付きがいいのか、、パンパンなショートパンツにカラータイツ、デニムのシャツ、髪は今風な彩をしている、８２に分け後ろと両肩より胸元に流している、前髪は幾分短め。その女性がキョロつく一平達を見つけた、どこかモデル風にカッカッとコンバースのスニーカーで歩を進め近づいて来る。
「お待ちしておりました、ＣＡの松下紀子です」
「その装いでは機内のＣＡさんとは分からず仕舞いでした、街中で会ったとしても分からんと想います」

「それよりも奥様のそのお召し物といい巧みに結われた髪にその金指、自分は奥様と分からなかった。一平さんは瞬く間に女性を見つけて来たのかと想いました」
女性は化け・・・と言い始めた時まりが肘で脇腹をつっ突いた。
「私は兎も角ＣＡさんに失礼ですよ」
と微声なれどきつい言葉が返る。
「自分は構いませんよ」
と笑い一平達を席に誘う、軽いカクテルを始めていました、とテーブルにはカクテルグラスが。
「ご希望がありましたら仰って下さい、ご用意いたします」
二人は間迷わずレミーマルタンを、テーブルにはファミレスで見かける様な数字付きのボタンが置いてある、ＣＡはボタンを押し三桁の数字を打ち込んだ。
「品書きに番号が書いてある、これを打ち込むとバーテンダーさんが用意してくれます、ソフトドリンクも有りますがカクテルから日本酒、焼酎、ブランディ等々銘柄を問わなければ揃っています」
ボタンの赤ランプが点滅し始めた、ＣＡさんは席を立つ、お盆にグラスが二つと乾きもんが二つ載っている。
「ここはワンドリンク毎に乾きもんが付いてきます、セルフ多用もしています、会計もここのＥＮＤを押すと請求書が出てきます、カウンター脇の帳場で請求書をかざし投入口に現金を入れると領収書が出てきます、お釣りも出るようになっています。このホテルはクルーの宿泊所兼憩いの場でもあります、一日を癒すとともに明日への充電の場です、一般宿泊さんも居られますが自分達も多く利用している、窓側の席に居る四人もそうです」
松下紀子は軽くグラスを目の高さに、通じたか四人はグラスを挙げ乾杯の仕草。
「フライトに差し支えないよう、自己責任で一日の終わりを満喫しています」
と言い捲る、一平とまりは顔を見合わせ互いの意志を確認するが如き小さな肯きをした。

「ＣＡさん、今度は私等の番だな、とりあえず乾杯」
グラスをテーブルに置くとＣＡが又もや言い始めた。
「お二方は安心して願い事が言えると想っています、尚も近づくける為にＣＡではなく名で呼んで頂けませんか」
不意に来たんで戸惑いもあったが一平は素直に、はい。
「紀子さんやな、のりは身近に二人居る三人目の、のりでいくよ」
相分かったとばかり大きく肯く。
「小生等を掻い摘んで申せば」
と一平がしゃべり出した。
「お察しの通り小生は三鷹署の捜査課刑事です。否元刑事です、今は趣味と健康を兼ねて公園やら野山を海岸等をデジカメ様のお供をしています、撮った画像を小生流に作成したＨＰにＵＰし小生流に日々を楽しんでいる」
今度はまりは言う
「八方面の白バイ隊員だった頃、隊長さんが忘年会と称し私達の班を麻布の洒落た店に連れて行ってくれました、照明は規定ギリギリかやや暗め、隊長は何時もここを使っているのの問いに、何時もではないよ、だけどここに座ると落ち着くんだ、と言いながら皆飲めるんだろ、水割りをウエイターさんにオーダー、何時しか皆は口が滑らかに」
奥様お代わりは、強いんでしょお酒はとのりがまりに振った。
「まー強いと言うかお酒が好きなだけ」
とまりは言った。
「程なくしてカウンターでじっと壁を見つめるか一人の男性に気付いた、レミーマルタンを嗜んでいる、時折チラッチラッと私達の方を見ている、隊長に聞いたあの人は良くここに来ているんですか、今までに何度か見た事がある、何か気になる事でも、私達を見張るか時折り様子を窺っているようですが、きみ、あの人はわしの感と言うか刑事の様だ、気に

なるようだったら隣のトンボが空いている行って、聞いてみたらって隊長が言う」
「で、奥様はどうなさいましたか」
「ここ宜しいですかと隣に座りました、眼を瞑りグラスを傾けていたがが私の声にハッとしグラスをカウンターに置いた」
「気付かれちゃいましたね、すみません私は皆さんと同じ警察官です、月に二、三回ここでグラスを傾けています、上手く説明できませんが落ち着くんですよ」
「チラッチラッと私達の方を」
「ストーカーにでも想われましたか」
いやそんな風ではと暫く世間話。
「私達白バイ隊はお開きになりました、隊長は感が当たっただろうと言いました。私、その刑事さんに軽く会釈し別れました」
奥様、その人とはそれっきりとのりが言う。
「十日が過ぎた頃私はふらっとその店に、アッと声を出してしまったんですあの刑事が、壁に向かってチビリチビリとレミーマルタンを、私はお久し振りですねと隣に」
「いい雰囲気じゃないの奥様」
やーと言ってグラスをカチーンさせてきました。そしてまりが言い始めました。
自分は四十四歳です、刑事の妻がいました、が捜索中不慮の事故で無くしました、妻を忘れず再婚にフン切れがつかず今日になってしまいました、と一平は言いました。
「まり、よさんかい、のりがもーいいと言っているよ」
と一平。
「自分は何も言っていないよ奥様続けて」

「あの夜、妻と再会したんだ、白バイ隊の中にいたのを見つけたんだ、自分は亡霊でも見たかと眼を擦った、妻と瓜二つだったと言う。彼と度々合うようになりました、人其々に愚痴はあると想うが彼はけして愚痴は零さない、旅行や趣味等々、世間話で私を飽きさせんでした」

「話が佳境に入ったね次を早く聞かせて」

「アニメ、ルパン三世の次元いや銭形警部ではないが、私からとんでもない物を盗んだの、私の真心をです」

「いやー奥さんドラマよりいいよ」

「年の差なんて何だと一平も私も、それで白バイ隊員をやめ結婚しました。

私が二十五歳、一平四十五歳の時でした、深大寺脇に老夫婦がソバ処を営んでいたが年故閉店してしまった、そこを譲り受け改装し新居としました。子にも恵まれ翌年には長女が生まれ次の年には長男が生まれた。二人とも大学を出て間もなく相次いで所帯を持った。それを機に二階を私達の居住用に一階は予てからの希望であったコーヒーショップに改造、種類は少ないが豆は本場もん、それにトースト等軽食と言ったところ、何処をどー嗅ぎつけたか深大寺参拝傍ら寄ってくれたり、近隣の刑事さんが一息入れるが如き来て下さるようになりました。今回は娘から出産に立ち会ってくれんかとE便が入った、一平と私は眼を細め了解と打ち返しました、てな訳でのりちゃんの乗務する便に偶然にも乗った次第、ところでのりちゃん、願い事とはどのような事ですか私等でよければ聞くよ」

まりの口調は親娘のような語りになっていた。

程ほど行けるのかのりはお代わりの数字を打ち込んだ、零れんよう先程とは違った歩の運びだ、席に落ち着いた。

「自分は三月に結婚し、五月には主人翔平を亡くしました」

まりは大きな眼を更に大きくしのりを見て言った、

「のりちゃんさっきは長々と喋ってごめん、何にも知らなかった私達で」

「まりさん、心配なく楽しく聞かせて頂きました。ご存知と想いますが多磨霊園の西に浅間山があり五月にキスゲが

咲きます、それはムサシノキスゲと言い知れ渡っています。五月二十三日朝、天気予報で崩れもなく今宵は満月だと翔平は言っていた。キスゲと満月のコラボを撮ってくる、遠回りだ帰りはいつもよりやや遅くなるかもしれんよと翔平は言いました」

「ハイどうぞと送り出した、マウンテンバイクに凝っていて常日頃最寄りのＪＲ駅までそれで行きます。翔平はピース王国の大使館員を務めていました、業務上前後しますが午後八時には帰ってきます。

キスゲ撮影に回ったとしても九時には食べられる、そう想い夕飯の支度をした、しかし十時を過ぎ十一時やがて日付が変わってしまった、アジの開きが載ったテーブルで転寝してしまった」

「突如南国パラダイスがスマホから鳴りました、翔平だ、とるなり嬉しさもあったが遅いじゃーないのと言ってしまった、が府中署交通課の稲垣です、ご主人と想われる遺体を確保しています、早急に確認して下さいと、何でーと、自分の頭は走馬灯、正気を取り戻しすぐ行きます、かっぽ着を外し翔平と色違いだがお揃いで購入したＭＴバイクに跨った。稲垣巡査長が言うがままヒンヤリした部屋に、中央に白布で覆われた遺体が、奥さん確認して下さい顔に掛けてあった白布を外す、紛れもない翔平だ、力が抜けへなへなと座り込んでしまった」

巡査長は事務的に自分に言い始める。

「この用紙に奥さんサインして下さい、死因は後頭部の傷から見てキスゲ橋から落ちた際、強打し脳挫傷と想われます、司法解剖させて頂きます、遺体引き取りはその後にお願いします。それから転落死した場所の血痕脇に鮮血で書いたと想われる記号のような文字のようなのがありました、直線やふにゃふにゃだが、かなの（リ）その下に漢字の（乙）の様な、奥さん何か心当たりは」

「全く見当つきません、その夜は涙が出尽くす位泣いてしまいました。翌日午後に府中署に行った、事故と自殺とで捜査を始めた」

と巡査長は言う。

「自分はそれを言われたとき巡査長に自殺はない、主人は学生時代ＭＴバイク曲乗りで準優勝、たとえ夜とは言えあそこから落ちるとは想えない、そして自分達は新婚ほやほやです、今朝だって自殺を仄めかす素振りは微塵もなかった、自分は言いました」

「検視の結果がでる　その時またお越し願います、今日の所はお引き取り頂いて構いませんと巡査長は言った」

翌日昼チョイ前、稲垣巡査長と相対していた、巡査長は検視の結果を言い始める。

「やはり頭部強打による脳挫傷が原因です、肢体に刺し傷の様な切り傷の様な痕が九ヶ所ありました、これはイバラの刺傷と想われます、あそこはイバラも多い撮影の際ひっかかったようです、死因はＭＴバイクの操縦ミスにより転落死が濃厚です。遺体とＭＴバイクは明日までにお引き取り下さい」

「自分は巡査長の言を聞きつつ怒り抑えておった、が抑えきれなくなった。何で翔平が否主人が操縦ミスによる転落死なんです、何でイバラにひっかかったんです、散策路にはイバラはない、在るとすれば柵の内側、昼間キスゲを二人で見に行った時、自分はもっと近づこうと柵内に一歩踏み込んだ、入っちゃー遺憾！、穏やかな翔平が人が変わったかと想う声で言い放った。キスゲも土から養分を吸収し生きている、その土を踏み固めてしまったらどうなる、そー死んでしまうと怒られた事がありました」

「散策路上にはイバラはない、その翔平がイバラ傷が出来る程柵内に入ったと想えない、ＭＴバイクに傷等はなかったか、翔平はＭＴバイク愛用の際はヘルメットを着用しています、それを被っていなかったか、良く確認し調べ再調査して下さい私は捲し立てた」

巡査長は困惑しきり、

「松下さん、上層部に今仰った事は伝えます」

「と言い自分は遺体引き取りを手配した、それとピッカピカに磨きこまれた翔平のＭＴバイクを引き取った」

「二日後早く翔平をゆっくりさせてやろうと想い葬儀を行いました、ピース王国からは一等書記官のシャルムさんと

補佐官の向家秀忠さんがお見え下さいました。棺を前に最後のお別れしている時シャルムさんが近づきセオリー道りなれど、お悔やみを申して下さりそっと肩を抱いて下さった」

「所轄では事故自殺で捜査しているようだが自分には信じられない、死因は別にある筈です、再捜査をお願いしているところです」

「シャルム一等書記官は一瞬表情を強ばらせ言う、身近な奥様なら分かりきっていると想います、松下事務官は心優しく曲がり事が嫌いな性分、自転車はルールに則って楽しんでいる、時折大使館まで乗ってきている、曲乗りも披露してくれました」

と言い始めた。

「その日は倅が自転車を乗り始めた、安全の為にヘルメットを被らなければいけないよな、こういうのだと説明する意味でご主人にお貸し願った、快く貸してくれました」

「現場にヘルメットがなかったのはその為だったか、自分は納得した。一週間経ってその後捜査状況を確認しに府中署に赴いた、稲垣巡査長が応対してくれました。が、監察官が来て本件は本庁扱いにすると言い、今迄の資料を全部本庁に持って行った、今後ご主人の件は本庁生活安全部が担当します」

と巡査長は言いました。

「自分には何の事だかよく分からない、本庁でしっかり調べてくれると想い府中署を後にしました」

まりは一平が女性と飲む酒は楽しく美味い、今宵もそんな風に見とったが黒目だけが異様な光を放っているのが見のがさなかった。

のりは僅か間が空いたが言い始めた。

「その二週間後空き巣に入られました、居間のガラスを破りカギを開け侵入したと刑事さんは言っていました。何もとる物が無いと部屋を汚してくと聞いていました、食器棚の眼につく所に紙幣を数枚置いています、空き巣は何をど

うなのかそれには眼もくれず翔平の机を荒らしＰＣを持って行きました。そんなこんなで翔平と想い出の家ではあるが井の頭に引っ越しました、だけんど谷端さん聞いて下さいこの件も本庁扱いになってしまいました。本庁へ行っても進展なし同然の返事ばかり、しょげ込んだ日々が続きました。一ヶ月ほど経ったとある日チャイムが鳴りました、チーフパーサーの緒方南美さんでした、自分は惑わず抱きついちゃいました」

「翔平さんを亡くし淋しさ悲しさ人一倍と想うが何をいつまでしょげとんのよ、早く復帰しなさい皆が待ってるよ、翔平さんの為にも」

「いつも自分等を叱る口調で言いました」

「クシャクシャのその顔、のりちゃんには似合わない、いつもの笑顔で搭乗者様とのりスマイルで接しアテンションプリーズと機内放送してよ」

「そんな訳でＣＡ復帰し今日になりました、長々と喋って御免なさい」

とぺこりした。

ここで一平はレミーマルタンをお代わりした。

「と言うとのりはご主人は事故でも自殺でもない殺害されたと」

「はいそうです、今話した通り自分には何らかで事件に巻き込まれ殺害されたと想っています」

「その後本庁に行かれた」

「行きましたが返事は同じ、二か月前自分は頭がガーン、本庁担当岡村巡査長は言った、本件はＭＴバイクの操作ミスによる事故死と結論付けられた、谷端さんには酷な言い方かもしれんがお巡りさんてそんななの、のりから笑顔が消えは疑惑の眼差しで一平等を見つめた」

そう言われ一平とまりは戸惑った、まりが言い出した。

「私達いや一平に真実を求めているんでは」

「はいそうです」
「小生は元刑事ではあるが現在はデジカメのお供をし野鳥、昆虫、植物等を撮影し小生流のＨＰを作りＵＰし楽しむ日々、そんな一市民です」
レミーマルタンを飲み干した、支払いはこれでと某カードをまりに渡す。
「明日は孫に会う大事な日だ、遅くならんよう部屋に戻るようにと言い席を立った」
のりは失望の眼差しで出口に向かう一平の背を見た。
「のりスマイルで行こうよ」
とまりは言う、
「翔平さんの件一平が解決してくれるよ」
戸惑い気味なのりに言う。
「小生に任しとけと一平は言ってたよ私には分かるの、にこやかにお酒を飲んでいるようだったが眼いや黒い瞳が輝き始め目黒のサンマではないがより黒く色変わりしていた、現役の頃事件に向かう時、同僚さんから一平はいつも黒目が輝きが増してくる、そんな訳で刑事課ではいつしかサンマと呼ばれるようになった。私には分かるの、気にしつつホテルに向かう一平はのりちゃんが言った事、整理していると想う。一平はお酒を飲むときは二時間と決めている今宵もその時間が来た、御心配には及びませぬ」
のりは安堵感らしき表情になる、ラウンジスタッフがのりに近づき囁いた。
「あちらの殿方がまだかと目配せを始めました、今宵もお願い出来ませぬか」
「あっあもうこんな時間、ちょと待ってて今準備します」
まりはその意味深な言にそれってとのりを見つめた。
「まりさんたら何か勘違いしてんと違う、自分は信州奈良井宿の出です」

「あの歴史的面影多分な観光名所と名高いあの奈良井宿」
「そうです、小さい頃より両親は土産物屋兼民宿を営んでいました、今は兄夫婦に任せ隠居の身です。二人とも演歌が大好き、それが縁で夫婦になったと聞いていります。小学生の頃当時流行った歌を良く聞かされました、のりも歌わんかい、言われるまま手拍子で歌いました、わしに似て上手いのう、お世辞もあろうが父は言った。いつしか父は一客室を改築しカラオケルームにしました、これが宿泊者に好評でリピーターも増えてきました、とある夜父は言う、のり皆の前で唄ってみろ、寝間着姿でコブシを回し好きになった人、右に左にはるみ節を披露しました、そんな小学生に拍手喝采。その後も歌い続けました。今風な曲は苦手ながらも演歌は春日八郎、坂本冬美等々本職さんに負けん位になり今日に至りました。支配人は多分CA仲間から聞いたんだろう、とある日ここで歌ってはくれまいかと言う、自分が来た時、客層見判断し今宵お願いしますかと声を掛けてくるようになりました」
「すごじゃーないの一平ったら小生にも十八番があるんじゃーと言いカラオケに、デカさん仲間を誘って行ってみようって事になったの、自分じゃー時には想い出すように眼をつむりいかにも真摯風に歌ってんの、だけんどのりさん聞いてよ、調子っぱずれで頭がガァーンよ」
静かめに函館の人のイントロが流れ始め、よーこそ千歳にお越し下さいました、お仕事にご旅行に来られた道央、そんな北海道の想い出にと今宵演歌の数々をお送りさせて頂きます、ナレーター宜しくのりが各テーブルに語り始めた、そしてサブちゃん節が響き、黄色いサクランボと続く七十代以上と思しきお方多い今宵、懐メロに徹し三曲を披露し幕とした、が拍手が鳴りやまない、のりは支配人に目配せし好きになった人を、ワイヤレスマイクを持ちラウンジを時には握手をし歌い回った。
ワンマンショーは終わった、これ以上いてもキリがないのは分かっている、支配人にハイタッチしのりはまりを誘いラウンジを出る。
「まりさんはもっと飲みたかったかも知れんが明日に残さんが為、自分はいつもここでと決めています」

「良い心がけです」
とまりが。
「翔平さんの事は一平に任せておきなさい」
と言い電話番号のメモを渡しフロント前でタクシーに乗り込んだ。
Rホテルの七階の部屋の鍵をそーっと開けた、寝ている一平を起こさんがためだ、常日頃一平は五時には起き近くの河川を散策し朝食。
帯をほどき肌じばんになり歯磨きしシャワーを浴びる、最少限の下着をつけカラフルな膝上シースルーネグリジェで、姿見の置いてあるベットルームに、音を立てんよう抜き足差し足、一平がヘッドに枕を当てがい上体をもたらし両腕を頭の後ろに回している、考え事をしているのか眠いのだろうか虚ろな眼。
まりはアッと小声を発し、
「もー十一時回ったよ」
それより驚いたのはまりの容姿に一平の方だ、
「そんなにあたふたしてどーしたの」
とまり
「子供達が独立してから夜はいつもよ、一平より遅く寝て朝は早く起きる、だから分かんないのよ」
と姿見を見、髪の毛を整えながら言う、
「いつも新婚気分でいたい、そんな想いでこのネグリジェを着始めたの、何だったら今晩お邪魔しても」
うっと声を詰まらせ一平は布団をひっかぶった、まりは想わずクスッと白い歯を見せる。
翌朝散策を終えキーボードを叩き整理し始めた。
・二日後葬儀

ピース王国からシャルム一等書記官と補佐官の白家秀忠出席、一等書記官はお悔や言う

・転落死当日ヘルメットをシャルムに貸す
・ヘルメットを被っていれば助かったかも
　のりの言にシャルムは顔を強張らせ複雑な表情
・葬儀から一週間（六月二日）監察官により本庁扱い
・六月十六日空き巣、現金に目もくれずＰＣのみ持ち去る
・一か月後六月二十三日想い出の地だが引っ越し
・翔平の安住の地探しやら納骨や・・・、ただ日が過ぎるばかり
・ガーン　十月に本庁に行き捜査状況確認、運転ミスによる転落死が告げられた
・ぼーっと又もや日が過ぎる
・十月末チーフパーサーの緒方南美にＣＡ復帰を促される
・十一月三十日機内で小生とまりに出会う
・十二月二日ＣＡ仲間　松坂里英

翔平が亡くなった三日後近隣で空き部屋による不審者

等々一平は掻い摘んで書き出した。

一平は数年来見せる事ない表情でタブレットを見つめている。

「おはよー」

頼まれた一件は今は闇と化しているが若き女性と適度の酒、快適な目覚めだと寛ぎ姿のまりの後ろから肩に両手を添えた。

「よーござんしたねー」
とまりは相づちを打つが如き仕草。
Rホテルはネット上は朝食なしだったが七時から九時までバイキング形式の朝飯が用意されていた、娘の出産予定日だが時間はたっぷりあるゆっくり食べて行こう、魚介類にポタージュスープに煮物にスライスしたハムと生卵が、程よく焦げ目がつく食パンを二切れにバターにお茶を、いつながらとは言えまりが一平の脇腹を突っつき言う、
「又もやごっちゃまぜでは」
「小生にも幼少の頃があった、野菜の味噌汁を麦の入ったご飯にかけ食する事しばし、時にはヤギの乳をもかけた、ソーセージがありゃー最高、小生のそんな日々の食生活。こーして食したい物が和洋ごちゃまぜなれど食べられる今、最高の朝飯だ」
まりは、はい、おわかり申したとみそ汁とおしんこと焼きのり、卵かけご飯に箸を付けた、カーゴパンツのサイドポケットからルパン三世のテーマが鳴る。
セイ君からだ。
「早めだが歩美が分娩室に入った、午後には孫と会う事が出きる」
と言う。
「相分かったお昼前には着けるようにする」
と返事しガラケイを終う。
まりに女性は支度に時間がかかる先にと言い新聞に眼を通した、これと言って一平を引き付ける事案は載っていない、しいて言えば今年は暖冬模様等、まりが奥から声を掛けてきた。
「はーい雪道バージョンです、支度で来たよ」
髪は三方に下ろしシャツは今風とここまでは良いだが、不規則に数ヶ所横切れしたジーンズにカラータイツ。

「そのジーンズで出産に立ち会うのか」
「これファッションです」
一平はもの言わず足裏と脇腹にホッカイロを張る、チェック柄にボタンダウンのシャツに、ダウンベストを色褪せたＭＴ１に袖を通しダウンコートを羽織った。産婦人科院の最寄りの駅までＪＲで十数分、そっからタクシーに乗れば十分で着くと聞いとった、道央の町しかも雪や歩くのも趣があるだろう歩を進め始めた。雪は少なめだが日蔭は凍っている、雪対策靴に頼ったせいかアイスバーンでづっこける、そんなこんなで三十分程遅れてしまった。
お昼をチョイ過ぎた頃医院に着いた、二階の看護師さん詰所に行き娘の親です、挨拶を交わしながらダウンコートを脱いだ、看護師さんは二人の出で立ちに戸惑いの眼をする、無理もない小生等は娘が話していた、父上は六十九母上は四十九歳です。
二十歳代なら兎も角二人の装いは聊かのようだったっが看護師さんは我に返った。
「娘さんは部屋で待っています」
と案内してくれる。
歩美は小生等を見、安堵感しきりな笑顔が、ベット脇に立ちポンポンの腹を見せてくれる、看護師さん曰く。
「間もなく誕生します、あちらの控室でお待ち下さいと言い腕をその方向に」
看護師さんは更に言う。
「一時間かも二時間かも、間もなくですと付け加えた」
近くの食事処で刺身ランチを食し待合室に、外が寒いせいか暖かいと言うか暑さが感ずる、二人ともＭＴ１を脱いだ、看護師さんが入って来る。
「おめでとうございます、元気な男の子が誕生なさいました、お嬢様も元気です二十分後には面会できます」
と言う、看護師さんも余裕ができたか今では珍しくなった一平のチェックのボタンダウンシャツを見いる、察したまり

が言い始めた。
「看護師さんはご存じないかも知れんが五十年六十年前アイビールックが流行っていました、米国フットボール連盟大のレンガ造り校舎に蔦が茂る。
当時、大学の校舎には蔦が生い茂っていてそれがシンボルともなっていたので、フットボール連盟は[アイビーリーグ]と呼ばれるようになりました。学生達は短髪でボタンダウンシャツにジャケット、チノパンを愛用、そのスタイルをアイビールックと言うようになった。やがて日本に飛び火する、それに故石津謙介さんが拍車をかけた　黒に赤マークの[ＶＡＮ]ヴァンブランドをリリース、若者はそれらを着、銀座はみゆき通りにこぞって登場、みゆき族と称し若者ファッション文化を齎した、一平もその一人、短めな髪の毛を七三に分けＶＡＮの紙袋を小脇に抱え闊歩していたと聞く」
「お父様のそのお召し物はその当時の名残ですね」
更に看護師さんは言う。
「お母様も中々どうして、その破れたジーンズといーＭＴ１決まっていますよ」
お世辞もあろうが二人はピースサイン、それを確認し廊下に消えた。
僅かな時間が過ぎた。
「お嬢様と対面できますよ」
と看護師さんが声を掛け病室に案内してくれる、歩美は起き上がれんが眼をぱっちりさせ微笑んでいた。
「おめでとうございます」
看護師さんが押すワゴンに載った新生児が登場する。
「お坊ちゃまですよ、新生児室でミルクを飲ませていました」
ボールペン先大のシンボルを看護師さんが見せてくれる。
「だっこも可能です、手を洗って来てください」

言われるまま手を洗ったはいいが小生等は眺めるだけ。
セイちゃんが来た、生まれたよと聞くが早く娘の手を取り労を労いワゴンに目を移し眼を細める。
「おめでとうと言いつつ、お返しなしとお祝いを」
セイちゃんは怪訝げに小生を見おった、まりが口をはさんだ、
「一平は常日頃慶弔事は値切らん主義、又見返りを期待するなんぞ以ての外、今迄もお祝いを渡す際はそう言って渡しています。これからお坊ちゃまにお金は掛かります、お返しなしで快くお受け取り下さい」
「父上はそういう男（ひと）です」
と歩美がホロー
「相分った、お分かり申した」
とセイちゃんはお祝いを受け取った。
半時程四人否五人でカーテンで仕切られた部屋で過す。
「お坊ちゃまお母様はお休みの時が来ました」
と看護師さんが、三人は病室を出て控室に、まりはウオーターサーバーより自然水をコップに注ぎ持って来た。
「ところでセイちゃん名はどうなった」
「決まってはいるが歩美さんが出生届を出すまでは誰には言っちゃーダメ、私から言うと口止めされているんだ」
「娘達がやっている事口出しせんとこ」
が一平はセイしゃんにそれとなく探りを入れた
「今風な名かやそれともアスリート風」
「父上様、ご勘弁を時期が来たらお教え致します」
控室の廊下を挟んだ反対に大きなガラス窓の保育室がある、ワゴンに親の名が入った新生児が、時折眺めに行った

り雑談して過ごした。夕飯が始まった、小生等も夕飯とするか娘に明日また来ると告げ外に。
「さむー」
「これが北海道です、日蔭は別として、雪解けも多いしまだ暖かい方です」
とセイちゃん。
「ホテルまで送りましょう」
ハイブリットカーの後部座席ドアを開け乗り込んだ、R36に出た街灯が灯り始める。
「帰宅時です幾分車が多い、左側全体がサッポロビール工場です、そしてその先がキリンビール工場です」
「北海道はサッポロビールだけではないんだ」
「キリンビールもここでは多く消費されています」
「どっかで食事してこーや」
「国道沿いにあります、そこに寄って行きましょう」
セイちゃんは相づちを打った。
嫌な予感が的中、雪ならぬ雨がポツリ来やがった、そして土砂降り。
「あそこです、美味です」
セイちゃんは車を駐車場へ、ウイークデーなれど夕食時、入り口近くにスペースがない。
「父上駆け足で」
とセイちゃん、豪雨としか言いようない、レンガ造りの建物が半ば霞む、渋るまりを追い立てるように入り口に走った、セイちゃんも素早くもキーロックし続く。
「豪雨の中ようこそ、三名様ですね」
事務的な言い回しでお嬢さんがこちらにどうぞ、運よく席につけた、滴と言うか濡れてしまったが適するだろう、ダ

ウンコートを背もたれに掛け三人はやれやれの表情。
セイちゃんは手慣れたもの、テーブル脇のピンポンを押した、すぐさまお嬢さんが現れ手際よく注文、ついでにキリンビールを注文、熱燗でもと想っておったがセイちゃんの言うがままに、はいと返事した。
「北海道では雪降りしきる野外のイベント会場、温ったかい飲み物もありますが雪降りしきる中で冷たいビールを好んで飲みます」
と言う。
室内なら分かるが降りしきる野外でと小生とまりは想った。次々と皿が運ばれる食べるのに忙しい、幸いにして二人はいくら食べても多少変動はあるにせよ、ヘルスメーター必要なし、セイちゃんは羨ましがった。
ルパン三世のテーマが鳴ったのりからだ。
「フライトを終え井の頭に戻りました、お孫さんは」
と問いてきた。
「ボールペンの先のようなのがついていたよ」
「おめでとうございます」
と弾んだ声。
「奥様から聞いたよ一平さん有難うございます、翔平の事宜しく。それと東京に戻ったらあのレミーマルタンの置いてある店にも連れて行って下さい」
「相分った」
電話の内容を察しもついたがまりは素知らぬ素振りでロースにサンチェを添え口に運んだ、そんなまりを一平の眼が流した。
二人のやり取りにセイちゃんは意味深な顔、一平は何食わぬ顔でハツと赤身を網にのせ始めた、まりは一平をちら

っと見る、のりとの出会いからをセイちゃんに説明した。
「父上は今だ刑事魂が抜けてないようですね」
と納得したようにセイちゃんは言う。
雨は多少頬にあたる程度、ホテルまで送ってもらう」
「明日十二時半にお迎えに来ます」
と言い残しセイちゃんR36に消えた。
午後七時を回ったが聊か寝るには早い、ソファーに腰かけ一平は一点を見つめた、かと想えばスマホにメモするが如く雨垂れタッチ。
孫も無事生まれ安心しきり一息と言ったところだが、多分のりちゃんが言ってたご主人の事、きっと整理しメモ書きしているに相違なしだろう、斜め向かいに全国チェーンスーパーがある、行ってくるよと声を掛け、まりはドア方向。
一平は雨垂れタッチ止めず言う。
「えってらっしゃい、雨が雪に変わるかもづっこけんなよ」
「一平と違うがな、九時頃には戻ると想う」
「小生は虫の息かもしれん」
ニッコリしいつもの事です、行って来ますと言いまりは廊下に消える。
スマホの手を休め時計を見た、八時を大分回っている、シャワー浴び寝るとすっか。
寝ている一平を気遣かうか、そーっとまりは部屋に戻った、時は九時十五分、まりはアッ小声を発する、明かりはここかしこで付いている、テレビはニュース番組、備え付きの夜具を着ているが、一平はベットに入っているもの乱れた上半身が布団から出ている、ウッッ、もしやと想い顔に頬を近づけた、一安心、確かなる息遣いを感じた。
歩美も無事出産、安堵感しきりなのだろう、布団をかけ頬に手を添えた。

「しーゆーとまろうもーにんぐ」
翌朝快適な目覚めだと一平は起きた。
「ゆんべ小生のほっぺたを見知らぬ女性に撫でられたような気がする、でも、おはよー」
「それはようございましたね、今日は昨日と違い天気はまずまずだってお天気お嬢さんが言ってたよ」
「モーニングコーヒーとでもいくか」
缶コーヒーを二つ買ってきた。
今日はセイちゃんのご両親と祖父母さんが来ると聞いている、等話しながら二人は缶コーヒーを嗜み始めた。
「後一時間でモーニングサービスが終わってしまう食堂に行こう」
まりを促した、朝食を摂りながらまりは昨日からの表情は何時もと違った一平を見ていた、箸を進めながらそれとなく聞いてみた。
「翔平さんの事故死？」
「あれほどまでにものりちゃんは事件性ありと言う、突如所轄から本庁扱いになったんや、小生の黒目が騒ぎ始めちまった」
既に九年、刑事魂が抜けたと想っていたが一平はやはり刑事、一平のやる事にはポジティブなまりは言う。
「お気の済むように」
「有難う東京に帰ったら始める、迷惑かけるかも知れんがー」
「改めて断る事はないよ何時もの事、セイちゃんが迎えに来る支度を始めようお坊ちゃまと再会だ」
二人とも気もそぞろ。
昼過ぎにはご両親がお出でだ、まりの奴ひょっとしたら着物が脳裏に、が非に然ず昨日とは違うが雪国仕様で、すっぴんのまりが出来た。

「やれやれ、取越し苦労だったか」
窓越しに保育室を眺めた、二人新生児が居る、親の名札を見て孫を確認、看護師さんがごく自然と携わっている。
娘の部屋に行った。
「元気してっか」
「息災でござる」
冗談交じりな返事が返ってきた。
看護師さんがジジババですよとお坊ちゃまを連れてきた。
「小生はジジではなく一平と呼ばせようと想っているんだが」
「それは失礼致しました一平さんですよ」
と看護師さんは坊ちゃまに語り掛けた。
「今日から添い寝の準備に入りますが暫くはお母様の隣にワゴンを置いていきます、時間まで傍にいてやって下さい」
と言い残し看護師さんは廊下に。
娘にと問いた。
「名は決まったか」
「決まってはいるがくる日まで教えん」
「小生だけでもと更に」
「出来ませぬ、ぜってーできぬ」
「ならばと今風かアスリスト風か、はたまたアイドル風か小生にも分かるような名では」
「教えねー、ぜってー分かんねー」
ときたもんだ、背後でセイちゃんがクスッと小笑いを発した。

「そんで父上、その時が来たならば歩美が自分から言います、孫が出来たと皆に言わんようにしてやって下さい、名と一緒に言い皆を驚かせます、てな僕等の楽しみ事でもあります」
小生の言もまりは分からんではないが。
「親娘です、ここんところは娘達の言う通りにしましょう」
「相分った」
孫に顔を近づけたりほっぺを指で摩ったり・・・。
時間ですと看護師さんが入って来た。小生とまりは待合室に移動、セイちゃんはご両親を迎えに。一時半程テレビを見たり雑談をしているとセイちゃんに引き連れご両親と祖父母さんが控室に、挨拶をそこに窓越しにお坊ちゃまを確認。
「アッ動いたこっちを見ているようだ」
等々、眼を細め綻んでいる顔が、小生は背後ではあるが感ずる。
「一平さん達のフライトが近づいています」
セイちゃんに委促され待合室に、坊ちゃまに関わる慶事諸事を確認し空港へ。セイちゃんに娘と孫を宜しくと言い残し車を降りた。
「早めに着いた、フライトまで時間があるが搭乗手続きを済ましちゃおう」
ウイークデーしかも昼を少し回ったころ、時間のせいだろうか空いている、大型スーツケース二つと二尺大のハッポースチロールを預ける、地上アテンダントさんは言う。
「出発三十分前には手荷物検査を済ませて下さい」
「了解」
小生、後ろに搭乗手続きする人がいないのを確認し尋ねた。

「ラーメン店が集まった食道場があると聞いとった、それは何処ですか」
「三階です」
すかさずアテンダントさんに聞いた。
「で、お勧めする店は」
「一幻です、えびそばがgoo」
と言いよった。
「ありがとう」
礼を申し三階へ、店はすぐ見つかった、だけんど数人が席待ち、待つのが苦手な小生思案顔。
「すぐですよ」
とまりが言う、十分少々。
「お二人様こちらへどうぞ」
エプロンにバンダナ姿の店員さんが声を掛けてきた。
「お決まりになりましたら声を掛けて下さい」
すかさず頼んだ。
「えびそば二つ」
「かしこまりました」
程なく着丼。
「テーブル脇にナプキンがございますご利用下さい」
「相分った」
麺は太細どっちかなと小生、細麺を期待すれど反してやや太め、レンゲでスープを一味、味噌ベースに濃厚なれど

臭みが中和されたマイルドなエビ味、まりは物言わず食する。
「御馳走さま」
美味かったのか食うのが早えー。
小生遅ればせ。
「ごっさん」
出発ロビーで寛いでいるとルパン三世のテーマが鳴った、村上眞姫からだ。
「羽田は何時に着く爺っ様が待っている、お孫さんのお祝いも渡したいし着いたら道場に来てだって」
「あっありがとう」
と一平は口籠る、脇でまりが言う。
「相承知しました、お邪魔させて頂くます、お爺様の好物、魚介類を持って行きますと伝えといて」
「了解」
と返事がけえってきた。
都市化ゆえ緑が減った三鷹市だが大木が数本残る一角で二人はタクシーを降りた、門には柔術道北野流道場と記されている。
重い開き戸を押し踏み石伝いに進み中庭に、右手が道場左手が母屋、稽古が終わったんだろう十数人の小学生が出てくる、一平を見つけ口々にオスッと発し門外へ。流派道主が母屋玄関で手招きしている、一平とまりは合わせたかのように右手をあげた。
道主は村上一太郎、子は裕太郎（三鷹署捜査課長）に孫の眞姫（保育士）との三人暮らし、道主は五尺三寸足らずだが風貌はいかにも柔術者そのもの、白いもの多めだが肩まで伸ばし顎鬚も七寸ほど。
「奥方、よう来られたなこちらにどうぞ」

二人を真新しい囲炉裏端に案内する。
「一ヶ月前から稽古の合間にコツコツとわし流で、ついこの間、九州より取り寄せた木灰を入れ完成、早速だが使ってみょう」
自在鉤にはイモやタマネギニンジン等土物が煮立っていた。
一平はハッポウスチロール箱を開けた、ズアイガニ、イカ、ホタテが入っている何れも生食用、それを見、不愛想だった道主の顔が綻んだ。
小学生に稽古つけていたマキが終えたのだろう道着姿で入って来た。
「ほほーいいところに来たな、早速にこれ等を調理せい、おっいかんがな、初対面やろこちらは一平殿の奥方様や挨拶せんかい」
「爺っ様何言うてんの、コーヒーショップいっぷくのまりさんよ、何時もコーヒー代とってくれんのよ」
「まりさんは爺っ様より良く知っています」
「ほほーそうだったか」
頭を掻き始めた。
「日頃一平いや一平さんにはカメラ技術をはじめお世話のなりっぱなし、ありがとうございます」
道主が礼を申し述べた。
「マキちゃん、これからも一平を宜しくね」
とまりが言い終わるとやおら爺っ様が上目線で言い始める。
「十五分でこれ等を調理せい」
「任しといて」
とマキは返事し黒光りした引き戸を開け台所に消える。

「どー調理するか見て来たらどうだね」
一平はまりに声を掛けた、まりが後を追うように出ていく。
「マキさんお手並み拝見させて頂きます」
「まりさんに観られちゃー手が震えちゃうなー」
と言いつつもまな板と出刃を出した。
「出刃使う時は毎回砥石で研いでいます」
とサウポーよろしくシャーシャー音。
まりはＣＡののりちゃんも自分と言ってたなー、ここにも自分が居るではないか、クスッとす。
「ホタテは貝ごとさっと水洗い、まな板に洋食用のナイフで合わせ面より浅い方の貝より柱を外した、開きと反対も外す、残り半分は生食用にと貝ひもを外し柱だけにし繊維にそり出刃を入れ平皿へ、貝ひもは塩をつけ水洗いしぬめりを取り冷凍に」
「ひもは爺っ様の酒の肴になります」
とマキは言う。続いてイカ。
「あっそうだ、まりさん手伝って」
まめ挽きのような道具を指さした。
「大根を適度に切りここに入れハンドルを回して」
まりは言われるままに、大根は刺身のつまに変身。
マキはイカを一杯取り、足と共に内臓を抜いた。
「指を入れ、付いているところを離すようにだましだまし」
「そう、まりさん上手、内臓は塩辛に適するが今回はラップし冷凍に、足は三本づつカットし塩を付け水洗い、これ

等は明日からの爺っ様の酒の肴にさせて頂きます、次は皮むきです、皮は二枚あります上部に出刃をそっと入れそこに親指の爪を入れ摘み片方に手で押さえ一気に下方に、くるっと剥けます、まりさんもやってみて後は適度にカット、カニは脚を外し手加減宜しくスーッと出刃を脚に沿っていれる、こうすると食べやすくなります。まりさん、自分が使っているこの出刃、普通のと違います」

「どこが違うかって分からない」

「今つかってた出刃は左利き用です」

「出刃に左利き用があるとは知らなんだった」

「カニの脚を調理する時は右に持ちます、裏を上にし脚を削ぎます、こうすると刀身の平がカニ身に食込みを防いでくれます、アッ後四分まりさんそこの戸棚から皿出して盛り付けて」

まりは言われるがまま、まり流に盛り付ける。

「はーいおまち」

と囲炉裏に皿が並ぶ、道主は十五分と言ったは待ちくたびれた様子、一平等を並んで座らせ両側に道主とマキ、言わばコの字形。

「一平殿とまり殿のお孫さんに乾杯しよう、お持ち下さった男山で、マキつげ！」。

美ん味い、皆は顔を合わせた。

「殻付きホタテとカニ脚それに甲羅はマキに任せる」

マキはがってんの表情、手際よく多からず少なからずで網の上に。

皆は生ホタテとイカをワサビ醤油で。

「新鮮そのものだ」

と道主しきり、空グラスをマキに。

ルパンが喚き始める、のりだ。
「あいや失礼」
一平は黒光りする板戸裏に。
「久方振りにオフがガチンコしたの、今ＣＡ同期仲間五人で吉祥寺の『居酒屋で女子会」
「おおおっい、そこは小生の」
「やっぱし、アオゲラの写真が飾ってあったよ、一平さん御用達店だよね」
「アオッ魔王空っぽにすんなよ、してもいいけど入れとくんだぞ」
と言うが聞こえぬふりをする。
「良く聞こえないよもう一度言って」
「聞こえてんだろう、ったくもー、飲み過ぎんなよ」
「御馳走さま、だけんど一平さん聞いて自分は何だか変な気がするんだ」
ＣＡ仲間松坂里英が言ってた事を話し始めた。
「五月末の事、入居する部屋入り口前を掃除してた時、背後でカチャカチャ不規則音がしたの、その部屋は先月から空き部屋、入居予定者が下見にでも来たのかと想った。その時はそんで終わった、が暫くすると通りに宅急便が止まった、私の部屋は端っこだからドライバーさんの足音らしきがして、空き部屋をとんとんとノックオン、受け渡しをしてるような。私もそうだったが引っ越し早々荷が届く事はある、落ち着いたら挨拶にでも行こう。
隣人と思しき人は薄目な段ボール箱を小脇に抱え人目を避けるように大道りに出て行った。三日が過ぎたが入居の気配なし、いつしかその事は記憶からが消えていた」
「のり、忘れようとしているのには申し訳ない」
「ううんうー大丈夫だよ」

とのりは首を横に振った。
「それよりもその時の状況、分かる範囲で教えて」
「男だったのは確かだが日常ある事と想ってさほど気に留めていなかったので良くは、あっそう顔は見えなかったが縞の上下にピッカピカに黒光りしていた靴を履いていたとのりが」
聞くにつれ一平の黒眼が動き出した、この男とのりのご主人の事故死関連・・・。
「一平どう今の話、自分は翔平の事故死と不可解な行動をした縞の上下を着た男の出現、隣接市だし何か関連があると」
「五人で飲むのは久し振りやろ、その件は小生に任せて今宵楽しくやれや」
「相分った」
のりは一平風な返事をした。何食わぬ顔で戻った一平が席を着くなり道主が言い始めた。
「刑事魂とやらが騒ぎ始めた様だね黒目がそう言っているがな」
マキが爺っ様を制した。
「魂とやらに風を吹き込むのはやめて下されまし、美酒美味の味が変わってしまいまする、一平、奥方様ホタテとカニが焼けました、お手元にお取り下さい」
常日頃使いよるつっけんどんな言い回しではなく今宵はやけに敬語を使いよる、そんなマキに道主は肩をすくめ含笑い、男山が四分の一に平鍋には甲羅だけとなった。
「一平、爺っ様に甲羅あげていい、大好物なのよ」
とマキが言う
「いいとも」
ただいまの声、裕太郎が帰ってきたマキの父だ、匂いに誘われ炉端へまっつぐ、一平とまりを見、マキにこちらはどなた

様と言った。
「はーい只今紹介します、この四月より三鷹署刑事課課長に着任した父の裕太郎です」
一平は極自然に頭を下げた、まりにお前何やってんのと言いたげ。
まりはクッスッとする。
「いっぷくのお客様です、ごひいきに有難うございます」
「常連さんとはつゆ知らず失礼しました」
一平も爺っ様同様に頭を掻いた。
でこちらはどなたと父裕太郎はマキに催促。
「まりさんのご主人谷端一平様です、お嬢様が道央でのお子様出産に立ち会われお土産をお届け下さいました」
裕太郎はキョトンとした表情を浮かべるも真顔になり聞いた。
「谷端さんと言えば自身の勘と足で捜査し数々の難事件を解明されたあの谷端さんですか」
爺っ様が口を挟んだ。
「その通り、ちゃんと挨拶せんかい」
一平は自慢するでもなく言い始める。
「そんなに畏まられても困ります、今は一人の市民であり道主殿には武術等一方ならぬお世話を頂く身です」
マキと一平の出会いはマキが中三の時とき、師範同然の一平が道場で汗を流していた、道主が一人の娘を連れて来た、わいの孫や女だてらに鼻っぱし強く学校でも苦言多々と言った、それから一平とマキの付き合いが始まった、何処で聞いたか一平が野鳥撮影している事を聞きマキは連れてってと申し出た。
一平は躊躇せざるを得ない、いるかいないか分からない、いると分かっていてもお出ましをずーっと待つ事もしばし、山中をさ迷う事も、当然ウオシュッレトなどはない。街中の公園で鳥撮りもあるが殆ど今言ったような場所での野鳥撮

影。
「おもしろそう」
マキは断念するでもなくのり気十分。
それ以来一平の鳥撮りに宿泊を含め同行するようになった、時には一平に代わって機材を担いだりシャッターを押したり父裕太郎以上の父娘関係となる。
村上一太郎は口を開いた。
「一平殿に稽古をつけてもらい、鳥撮りに同行し始めてから中学の先生曰く、クラス内で談笑も見受けられる、村上眞姫は人が変わったように成った、お爺様、家庭で何かおありでは」
と担任が聞いた。
「母親はマキが小さい頃病死した、父親は仕事柄留守がち、普段はマキと二人っきり、学校から帰ってきたら道着を着せるようにした、知り合いにお願いし休みには鳥撮りとかに行かせるようにもした、ただそれだけ」
担任はそれだと言ってた。
「二十五になったいま父親とは大違い稽古熱心、小学生の良き師範も務めている、休みには鳥撮りで過ごす」
「爺っ様、一平が困ったような仕草を始めたよ、そのくらいでいいじゃん」
マキはまり以上に一平を知っている、後四半時で一平が言う宴席は一時だ、アク取りのような網で平鍋内のカニクズを掃除し台所へ立った。ご飯を洗いザルに入れ戻る、カニ出汁たっぷりな平鍋にご飯を入れ溶き卵を入れておたまで適度にかき回す。
「父っ様には後ほどお願いがあります、男山と肴は用意してあります後でゆっくりやって下さい」
と言いつつマキは雑炊をよそい始めた、食しながら徐に一平が裕太郎さんと道主に言を。
「マキちゃんは料理が得意と言うか上手ですな」

「あいや中三の頃わしも手を焼いていた、食生活も出来合い専門、稽古を始め鳥撮りに行くようになってからなんの風の吹き回しか本を見、料理番組を見自分流に料理をするようになった」
「爺っ様、究極な雑炊が不味くなっちまう、自分起こりますがな」
「マキさんの料理上手はよー知っております、鳥撮りには必ずおにぎりを作ってくれます、しかも三角形に、いや隣にいるのもなんだがまりの作るおにぎりはいくらライスボールでも丸いや」
まりは苦笑する。
どうもここのお屋敷はマキが仕切っているようだ、囲炉裏脇に載っている鉄瓶より急須に湯を注ぎお開きを告げた、父裕太郎も道主も従うだけ。
「父っ様、一平さんとまりさんを送って」
マキは命令調だ。
ハイブリットカーが門前に。
「お疲れの所申し訳ございませんなー」
「マキにあー言われちゃー致し方ない、鳥撮り時もそうですか」
「いや至ってごく普通のお嬢さんです、機材もすすんで持ってくれる、おにぎりにつまみに飲み物もちゃんと用意してくれます。家では一太郎殿も裕太郎殿もぼーっとするのが常では、自分が仕切らんと食にもつけん、そんな想いで村上家の一人として保育の合間に掃除洗濯はもとより家事を熟してんのでは」
「さすが一平殿、ようお分かりになさっている、その通りです、爺っ様は門弟には厳しい、魚さばきはマーマーやが家事事となるとからっきしダメ、あいつが居なければとっくにあの世とやらへ行っているといつぞやは言ってた、当然父に似た私、裕太郎も同様です」
そーこーしとったら深大寺傍のコーヒーショップに着いた、村上捜査課長に礼を申し述べると共に少々願い事があり

ます、後ほどお伺いしますと一平が言い終わるとまりが言い始めた。
「お伺いしたら宜しくお願いします」
ではと二人は車から降りコーヒーショップ脇の自宅に通じる階段を登り始めた。
「明日からは鳥撮りとのりさんの願い事忙しくなるわね、元気あっての一平だもん体に気いつけて、でどっから始めんの」
「本庁で解決済みやが事件性疑わし事、まずは転落事故現場だ明日行く」
美味い肴と程よい酒で快適な目覚めの一平、暖冬とは言えダウンジャケットなしでは十二月だ寒い。
「多磨霊園からキスゲ橋方面へ翔平さんが走った道を、ＪＲ小金井駅から自宅のある前原町を含め見てくる、今日は長玉、三脚は足手まといだ」
と言い３００のズームを肩にかけ早馬に跨った、勝手知ったる地へ向かった。
まだ陽がない早朝だ人も車もまばら、小金井街道から浅間山通りに入れば現場はすぐだが一ヶ所急坂路、健脚者でもチャリは無理。翔平さんは多磨霊園小金門を入り霊園内から比較的穏やかな道をキスゲ橋に抜けたと想う、無論山ゆえ登りも下りもあるが脚に自信ありゃーチャリ可能。霊園西側は小高い林が続き登り切り平たん路を行くとキスゲ橋、渡り切ると浅間山、橋の下は切通しになり浅間山通りが通っている、翔平さんはここで落ちた。
確認するようにメモ書きしチャリを降り浅間山８０ｍへ登り始めた、頂上に浅間神社がありそっから緩い下りの散策路で右側一帯がムサシノキスゲ群生地となっている。
「ここで翔平さんはキスゲと満月のコラボ撮影したんだな、足を引掻くような傷何処でついたんだろう」
ブツブツと独り言。
「人目なしを確認し柵内に入り撮影すればブッシュ刺し傷も出来ようがキンリンソウ、ギンリンソウが可憐な花をつける、良識ある人のする事ではない、ましてや大使館員がする由もない」

ならば何処で傷がついたか、結局見つからず仕舞い、キスゲ橋に戻った、幅２ｍちょい長さ２０ｍ位のつり橋なれど床は分厚い板がひかれ太め材で腰の高さの欄干が出来ている、偶然も考えられるがチャリでも故意なら兎も角落ちようがない、ムサシノキスゲの地とキスゲ橋を再確認し朝飯だ帰路に。

野鳥さんの水飲み場に寄った、早いもんだここの主とも言える三人の鳥撮り猛者さんが三脚を立てていた。

「一平さん今日は早いではないか密かに珍鳥とやらを撮ったんでは」

皆口々に。

「そんな事はないよ、五月にキスゲ橋で転落死があったよな、身内の方から事故ではなく事件性があると言った、元名うて刑事さんと見ました、それとなく確認していただけんかと」

「そんで素浪人さんは引き受けたのか」

と野萱さんが言う。

「現役を退いて九年、勘とやらも消滅しかかっている、所轄にも小生の言など聞き受けてくれん、頑として引き下がらない」

「出来る範囲で構わないお願いします」

「結局、小生が折れた」

「転落死した人はどう言った人、キスゲ橋を知っている地元の人かへ」

「新婚で二人とも自然が好きで、都内に新居をと予定してたが趣が講じてこの界隈に居を構える事となった、休日には二人ピッカピカなマウンテンバイクに跨りここにもよく来ていた、皆さんも彼らを見かけた事があるのでは」

野萱さんが言い始める。

「ああ、あーあの二人だな、いかにも自転車乗りらしき装い二人、何度か見た事がある、礼儀正しい人だった挨拶は確りし、鳥撮りに迷惑かけんと想いここでは自転車を降りそーっと押して行く、今日も野鳥さんとの良き出会いをと

言って通る、短パンから覗いた両脚は筋肉で出来ているようだった」
「夜とは言えあの青年が操縦ミスによる転落死とはわしも到底想えん」
と野萱さんは付け加えた。
「あれは所轄ならず本庁でも事故死と解決したんでは」
今度は大久保さんが訪ねて来た。
「一平さんは現役のように黒目が大きく動いていますね」
早野さんが言う、一平堪らずザックより包みを出した、
「白い恋人です皆さんでどうぞ」
「そー言えばお嬢さんおめでたでしたね男女どっちや、名は何と言うんや」
「男です、名は決まっているようだが届け出するまで小生にも教えんと」
「その日が待ち遠しのと違う、今度は黒目ではなく、ゆがみっぱなしな目が言ってるよ」
「皆にあっちゃー敵わん、朝飯だ退散します」
言い始めた時早野さんが引き留めた。
「あの日鳥撮果多分、ウキウキで引き揚げた、そんな私三脚を忘れてしまった。気付いたのは八時を回っていた、夜道を懐中電灯を頼りにここに来た、三脚はあった安堵感しきり。その時キスゲ橋方向より微かなモーター音の様な、十五秒程で止んでしまった、一平さん何か関連あっかな」
「今の所は何とも言へません」
鳥撮りさんは常に微かな鳴き声をキャッチするが如く耳澄ませてる、静寂なここは良く聞こえたんだろう、礼を言い残し一平は鳥撮り猛者さん等の視界から消えた。
コーヒーショップ脇の階段を登り踊り場から玄関に、カギは掛かっていない。

まりのお帰りの声を聴いた。
「帰りがいつになるか分からない、先に朝飯食べようとしてたとこ」
「腹減っちゃーなんとやら朝飯出来た頃やなと戻ったんや」
「で何か収穫は」
「無念ながら野鳥さんは常連さんだけ、だけんど早野さんがその夜微かなモーター音のような音を聞いたと言ってた、小生どーも引っかかるんだ早野さんのその言」
「一平、食べ終わったら今までの事整理してみたら」
具沢山の味噌汁に手を付け卵かけご飯を食。ガチャガチャンガチャ洗いものする音を聞きながらテーブル脇でキーボードを叩き始める。
「洗い物は終わったし洗濯は干したし時間だ、いっぷくの仕込みに行かなくちゃー、出かけるんだったら戸締り宜しく」
とまりは階下に。